

## 外国人が語った「明治三陸大津波」再考

梅本 順子

Junko UMEMOTO. The Tidal Wave of 1896 Described by Foreigners: A Reconsideration. *Studies in International Relations* Vol.38, No.1. October 2017. pp.35-42.

I introduced Mabel L. Todd's "The Tidal Wave" in my previous article entitled "Japan as Seen by Mabel Loomis Todd". In it, I identified the original newspaper and magazine articles upon which Todd based her essay on the Tidal Wave of 1896. In this article, I will define the role of the interpreter, Harutaro MURAKAMI, who translated the magazine articles in question.

In addition, I will define the effect of the picture "The Great Tidal Wave Portrayed in a Native Magazine" which Todd used to illustrate her work. Todd found this picture in a special issue of *Bungei Kurabu*, July 25, 1896, published to solicit contributions to the earthquake relief fund.

Furthermore, I will introduce another American journalist, Eliza Ruhamah Scidmore, who published her article, "The Recent Earthquake Wave on the Coast of Japan" in the *National Geographic Magazine*, September, 1896. Scidmore visited the damaged area and is said to be the person who introduced the word "tsunami" into the English language. By comparing her article with Todd's, I will clarify how the Japanese victims were described and what aspects of their characters most attracted their attention.

### はじめに

明治29年(1896)6月15日、東日本大震災(2011)の津波と同規模の津波が三陸地方を中心とした東北沿岸部を襲い、2万人ほどの死者が出た。この災害がおこったところ、たまたま日本に滞在していて、被災の現状を見聞した外国人がいた。あるいは、まだ津波襲来から日が浅く、その爪痕が残る被災地に足を踏み入れた外国人もいた。以前拙稿(「メイベル・L・トッドの見た日本—「明治三陸大津波」の記事を中心に—」)でとりあげたメイベル・L・トッド(Mabel Loomis Todd, 1856-1932)も明治三陸大津波の一月余りの後に被災地近くを通った外国人の一人であった。

拙稿を発表したのち、トッドの記事「津波」("The Tidal Wave")<sup>(1)</sup>に関しては、以下の二点が明らかになったので補足する。すなわち一点目として、通訳の青年とは、どういう人物であったのか。それというのも、トッドが記事を書くことができた背景には、彼女の一人旅に同行した通訳の青年の

働きがあったからである。今回、トッドが目にした新聞や雑誌記事を英訳して伝えた通訳の人物像が明らかになったので、トッドの記事に見る通訳の青年に関する記述と比較しながら紹介する。

また、二点目として挙げるのは、トッドが書いた記事にある挿絵(津波絵)の作者が判明したことである。絵の作者名のみならず、このような絵が描かれた事情についても本稿で明らかにしたい。

さらに、三点目として、トッド同様、津波に深く関心を寄せ、実際に被災地に足を踏み入れて記事にしたアメリカ人女性ジャーナリストを紹介する。彼女の名は、エリザ・R・シドモア(Eliza Ruhamah Scidmore, 1856-1928)といい、彼女が『ナショナル・ジオグラフィック』(*National Geographic*)の1896年9月号に書いた記事「最近の地震による日本沿岸部への大津波」("The Recent Earthquake Wave on the Coast of Japan")で使用した「ツナミ」(*tsunami*)という言葉が、世界中で「ツナミ」が使用されるきっかけになったという。シドモアの場合は、トッドのようにたまたま通り過ぎたと

いうのではなく、明治三陸大津波の被災地取材するという意図をもって現場に足を踏み入れ、写真を撮り、また自分の目で見た被災地を世界に発信したことにより、女性ジャーナリストの先駆けとなったのである。

すでに触れたように、トッドとシドモアでは、その姿勢に相違があるものの、二人が見聞したものを発信するときの視線には共通点が見られる。そこには彼女らが所属する西欧文化の価値観が存在する。彼女らの著した作品を通して、日本の被災者や被災地がどう発信されたのか。それぞれが書いた記事をもとに検討する。

### 通訳に伴われてのトッドの旅

まず、アメリカ人女性のトッドがなぜ、被災後の三陸沖を船で航行したのか、簡単に触れておきたい。北海道の北見地方の枝幸で、同年8月9日に起こる皆既日食観測の準備のため、すでに北海道入りをしていた、トッドの夫が隊長を務めるアマースト大学観測隊に合流するため、海路北海道を目指していたのである。この時、彼女が見聞した日本紀行のエッセイの中に、今回取り扱う「津波」と題する記事がある。そこには、明治三陸大津波の被災者、並びに被災地についての記述がある。夫らに同行して6月22日に「コロネット号」という大型ヨットで来日したトッドは、観測準備に余念がない夫らとは別行動をとって、仲間数人と西日本を旅したものの、皆既日食の日までには夫らが滞在する北海道の枝幸に到着しようとして、日本人通訳を頼りに一人旅を開始したのであった。

彼女の一人旅開始は7月20日ころであり、明治三陸大津波（6月15日）から一月余りが過ぎていた。海路北海道をめざすトッドと通訳は、7月27日、大連丸という日本郵船の汽船で横浜を発った。大連丸が函館へ向けての航海中、彼らは、三陸沖でいまだに海上を漂流する津波の被災者の遺体に遭遇したのをはじめ、津波による痛ましい現実と直面することになったのである。とくに災禍を意識し始めたのは、被災地の南端部にあたる荻浜（現在宮城県石巻市の一部）が、震災直後の6月より被災者への救援物資等の積み下ろしのための碇繋

所となっていたため、大連丸も寄港したときのことであった。この時、トッドも船をいったん降りている。なお、船のキャビンには、長旅の乗客用に新聞や雑誌が置いてあったが、それらは被災地の情報であふれていた。被災地の様子を少しでも知りたいトッドは、村上という通訳の青年にそれらを読み聞かせてくれるよう、頼んだのである。

日本について何でも知りたいと願うトッドは、見聞する物すべてを吸収しようと貪欲になっていたことだろう。それに対し、村上の反応はいま一つだったかもしれない。村上が通訳を引き受けた背景には、天文学と関わることができるという期待があったことだろう。それゆえ、時に夢中になるものがあると、通訳というよりは学徒に戻るようなところがあったとトッドは記している。一人旅のトッドは、村上青年の勉学重視の側面について多少批判を込めて述べたものの、すぐそのあとで、十分通訳として能力を発揮してくれたと書き添えている<sup>(2)</sup>。

通訳の村上についての記述は、2010年に発表された『枝幸研究』2号中の高嶋孝宗・山浦清による「メイベル・トッドの見た百年前の枝幸」と題する論文に見られる。青年の名前は村上春太郎といい、トッドの通訳を引き受けた当時は、名古屋中学校の教諭であったと書かれており、教師であったというトッドの説明と符合する。また、先の論文には、村上の手記が『枝幸町史』の上巻に採録されているとして、その内容をもとにトッドの旅程を再現した旨が述べられている。

村上春太郎（1872－1947）は、日本の天文学にその足跡を残した人物であった。なお、村上については、福井崇時の「資料集成 第七高等学校造士館の村上春太郎先生」（中部大学紀要『アリーナ』15号、2013）に、詳細なプロフィールの紹介がある。この資料とトッドの記事を比較しながらみてゆく。村上の生い立ちについてトッドは、「父親は瀬戸内海に面した四国の島の長であった」と書いているが、福井による資料から、瀬戸内海に浮かぶ伯方島（現在の愛媛県今治市）の庄屋であることが分かった。また、トッドは、村上の父親を紹介した後で、村上青年の人生すべてが研究に捧げられたと、裕福な家庭に生まれ育ち、学究一

筋の人生であったことに触れている<sup>(3)</sup>。

天文学者、かつ物理学者であり、科学史研究者と称される村上が、それまでに受けた教育についても、先の資料により明らかになった。通っていた今治中学や松山中学が廃校になったので、1886年に同志社の本科に編入するものの、病気で故郷に帰ったという。再び19歳で同志社理科学校に入学し、天体観測を経験したとのことである。1892年に同志社女学校で二か月ほど化学を教え、その後は東北学院の理科学校で三年間教鞭をとった。すでに『枝幸町史』のところで触れたように、トッドの通訳を務めた時は、愛知一中の前進である名古屋中学校の教壇に立っていたという。また、この年、ベルリン天文学会員およびフランス天文学会員に推挙されたとある。

トッドはエッセイの冒頭で、村上が英独仏の言語に堪能であることをはじめ、天文学に興味があり、望遠鏡の使用経験があることに触れている。著名なドイツ語学会の会員であり、また英語で発行されている天文学関係の雑誌を読んでいるため、ニューカム、チャンバース、ポールといった天文学者や天文学のジャーナリストの名前を挙げて、これらの名前は村上にとってはなじみがあるものだという。村上は、それまで受けた教育的背景からして、トッドの今回の旅にはうってつけだった。

また、村上にとってもトッドの旅に同行し、枝幸の観測隊の現場を観察できたことは、このうえない幸せであったといえよう。トッドの村上に関する描写はプロフィールに関するものだけで終わらない。日本語、特に漢字の難しさに直面したトッドは、古典を含めた日本語学習の困難さを述べたうえで、「村上さんのほおが青白く、やせぎすになったのは、フィクション、寓話や神話、伝説、さらに詩を含む日本文学全般のみならず、他国の言葉とその文学についても知識を求めたからである」<sup>(4)</sup>と持論を述べている。しかし、疲れをものともせず、村上青年はトッドに求められるものを訳して聞かせながら旅が続いたという。先にも述べたように日本について好奇心旺盛なトッドによって、見聞するものを訳すよう求められたが、大抵の官吏は個人差があるものの、英語が話せたので、訳す必要がないときは一人で過ごしていたと書か

れている。このあたりを見ても、学究肌の村上の片鱗がうかがわれるだろう。

### トッド使用の津波絵の出典

次に二つ目として、横浜から函館まで乗った大連丸に、備え付けられていた雑誌や新聞記事の中からとったとして、トッドが「津波」と題する記事の中で唯一用いた挿絵（母を背負って逃れようとしている男とその足元にしがみつこうとしている、子供を背負った男の妻らしき女の図）の作者が、小林清親（明治の浮世絵師、錦絵師、1847－1915）であることが判明した。ちなみにトッドは、作者や出典に触れることなく、ただ一言、「The Great Tidal Wave Portrayed in a Native Magazine」[日本の雑誌に描かれた大津波]と解説をつけている。どうしてこの絵が選ばれたのか、特に触れられてはいないものの、出典が判明したことから、この絵が描かれた背景も明らかになった。

この絵が描かれた当時、著作権ということが意識されなかったせいか、「津波」と題するトッドのエッセイ中に、作者名がないままこの絵が掲載されている。唐突な感じがしないでもないが、トッドの作品の印象を強めているのは、この挿絵の存在といっても過言ではないだろう。

明治三十年前後は、挿絵から写真への移行期にあたることから、大津波の惨状は、写真だけでなく、多くの画家による挿絵や新聞記事につけたスケッチによって人々の知るところとなった。特に津波絵については『風俗画報』が、明治29年（1896）の7月から8月にかけて発行した118号から120号で、「海嘯特集」（当時「津波」ではなく「海嘯」という語を広く用いていたため）と題するものを企画している。絵入り雑誌としては、当時『風俗画報』が代表格だったため、トッドが使用した作品もこの中からとられたのではないかと考え、調べてみたが、この三冊のいずれにも該当する作品は見当たらなかった。

さらに調査を進めたところ、山下文雄編『写真と絵で見る—明治三陸大津波』（1995）に収録されていた富岡永洗（1864－1905）の「母を背負い、妻を助けて漂ふ図」が、トッドが使用した母

を背負い、すがる妻子を振り切って走る男の図に続くものではないかと思われたため、前述の拙稿の注にてその旨を述べたが、誤りであることがわかった。この根拠とした『写真と絵で見る一明治三陸大津波』という本は、明治三陸大津波から百周年を記念して岩手県で企画された展覧会のカタログとして作られたという。さらに、この書籍の説明から、明治29年の大津波の直後、「海嘯特集」と題する雑誌の企画が『風俗画報』以外にも存在していたことがわかった。その中に、トッドが使用した作品があったのである。

明治の三陸大津波の折は、未曾有の大災害ということで、民間では新聞社などが中心になって義捐金を募った。そのような中で、博文館発行の『文芸倶楽部』という雑誌の『海嘯義捐小説』と題する臨時増刊号（明治29年7月25日）が出版された。この雑誌は、発行元である博文館の支配人の娘婿で、編集者の大橋乙羽（1869－1901）の呼びかけで製作されたものであり、6月27日の呼びかけ後、わずか五日余りで集まった原稿や絵画がもとになってできた特集号だという。大橋が、作家の所属（碩友社や文学界など）に拘ることなく広く声をかけたため、森鷗外、樋口一葉、尾崎紅葉、幸田露伴、泉鏡花、島崎藤村、徳田秋声などの、そうそうたるメンバーから原稿が寄せられた。

また表紙以外にも西洋画、日本画といった違いを超えて、八名の画家の絵を収録しており、そのメンバーは浅井忠をはじめ、富岡永洗、小林清親、鈴木華村、竹内桂舟、尾形月耕、長野年方、三島蕉窓という顔ぶれであった。作家、並びに画家の好意により雑誌の売り上げを義捐金にするという目的で、この特集号が企画されたとのことである。絵の方は全てが津波関連の作品であり、文芸作品の方も7割ほどが津波を題材にしたものとなっていた。

トッドの使用した小林清親の絵のタイトルは、「変 倏忽（しゅくこつ＝たちまちに）起る 相救ふに違（いとま）あらず」というものであった。すなわち、津波があまりに早く押し寄せたために、男は母と妻子の両方を助けるには時間が足りなかったというものである。絵画の八作品にはそれぞれ編集者の大橋による解説がついている。小林の該

当作品についての解説は以下のとおりである。

小林清親君の絵、濤、声と啼声と相半ばす、浪に捲き去るゝ者は、声漸く遠くして、而も断末魔の語を洩らし、流木に撲たるゝ者は、絶叫、助けを呼んで、声天に聞こゆ。惨澹、酸鼻、見るに忍びず、其間親を扶けて、妻子を顧みざるあり、親子処を異にして、死後屍を魚腹に葬らるゝものあり、人間の不幸、これより大なるはあらず。君の筆元来滑稽に妙、而して斯図の特に真面目なるは、君亦森嚴、筆を落とせしによるか、蓋し惨害当日の事、殆んど夢に似たるものあり。

結局、男は母も妻子も救うことはできなかったのであろうか。この絵の右上にはすでに波に飲まれた人の顔が散見されるが、ここに見る親子もこののちは同じ運命をたどったということかもしれない。このようなあまりにむごい場面が描かれたことにより、読者は衝撃を受けたのではなかろうか。2011年の津波が人家や車を飲み込む様子を、現代の我々はテレビやインターネットの画面を通してみることになったが、明治時代の人々は、このような津波絵を通して被災地や被災した人々の生々しい惨状を知ることになったのであろう。

トッドの目は、現場の凄惨さを超えて、男の選択が親を優先したことに向けられた。本文中のトッドの「日本で老人が受けている無償の愛と尊厳はこのような挿絵によくあらわれている。日本の挿絵は、両親を救うのか妻子を優先するのか、即座に決断できない男を描いている。男は、象徴的に年老いた母を背負い、安全な場所に急ごうとしている。子を背負った妻は男を追いかけて、絶望の中で男の足にすがろうとしている。」<sup>(6)</sup>という説明からは、親を優先するところに、欧米との価値観の決定的な相違を見たことがわかる。

## シドモアの津波記事について

最後に、冒頭でも触れた、エリザ・R・シドモアによる『ナショナル・ジオグラフィック』の1896年9月号に登場した津波の記事「最近の地震

による日本沿岸部への大津波」を紹介したい。既に述べたように、「津波」という言葉はシドモアが最初に用いたといわれる。ではなぜ、シドモアが被災地をレポートしたのか。まず、日本とシドモアの関わりについて触れる。

シドモアは、兄が外交官として日本に赴任したことから、1884年の初来日以降、数回来日している。特に津波のあった1896年は、二年前より日本で総領事代理をしていた兄が、この年に法律事務所を開設したことから、シドモアは横浜海岸通りに母と共に移り住んでいた。彼女を有名にしたのは、現在、毎年見事に花を咲かせて日米交流のシンボルとなっている「ワシントンの桜」が、日本からアメリカに寄贈されるときに仲立ちをしたことである。今年3月18日に放送されたTBSの「世界ふしぎ発見」という番組でも、桜の寄贈に纏わるシドモアの尽力が紹介された。「ワシントンの桜」と結びつけて知られるシドモアだが、女性ジャーナリストの草分けであり、後にアメリカ地理協会の女性初の理事にまで上り詰めた人物である。

ジャーナリストとしてのシドモアの行動力は、明治三陸大津波の被災地報道において発揮された。彼女の津波の記事が雑誌に表れたのは、大災害から三か月後の1896年9月であった。この記事の意義は、シドモアが被災地に足を踏み入れて書いたということ、ならびに欧米人として「ツナミ」という言葉を初めて使用したという二点からである。

この記事のタイトルは「最近の地震によるに日本沿岸部への大津波」(“The Recent Earthquake Wave on the Coast of Japan”)となっており、タイトルに「ツナミ」(“tsunami”)という言葉は入っていない。本文でも“earthquake wave”という表現が何回も見られるが、それに交じって2回だけ「ツナミ」が見られる。一回目は、事実を知らせる冒頭部分である。“On the evening of June 15, 1896, the northeast coast of Hondo, the main island of Japan, was struck by a great earthquake wave (*tsunami*), which was more destructive of life and property than any other earthquake convulsion of this century in the empire.”「ツナミ」の言葉は、“earthquake wave”の説明としてカッコ書きの中であり、また英語でないことを示すためにイタリッ

クになっている。次にでてくるところでは、住民が「ツナミ」「ツナミ」と叫んで逃げる場面であり、ここでは、とくに説明なくして「ツナミ」という言葉が登場している。

シドモア以外で、1896年に「ツナミ」を使用したのは、ラフカディオ・ハーンこと、小泉八雲である。彼の「生き神」(“A Living God”, 初出は『アトランテック・マンズリー』1896年12月号、後に *Gleanings in Buddha-fields*, 1897として出版)にもシドモア作品同様に「ツナミ」という言葉が登場する。ハーンの文章を見ると、“From immemorial time the shores of Japan have been swept, at irregular intervals of centuries, by enormous tidal waves, — tidal waves caused by earthquakes or by submarine volcanic action. These awful sudden risings of the sea are called by the Japanese *tsunami*.”となっている。

外国人読者を意識したハーンは、「生き神」の中で、多くの日本に関する情報を提供しており、主人公の濱口五兵衛<sup>(6)</sup>についてのエピソードが始まる前に、まず日本の沿岸部を襲う津波とは何かを語られる。そこに上記で述べたような「ツナミ」の説明が入っているのである。また、最後の部分で、無我夢中で火消しのために駆け上がってきた村人たちが、彼らが去ったあとの村を襲ったものの存在を確認したときに、口々に発する言葉が「ツナミ」であった。

出版の順ではシドモアが先であることから、現在では「ツナミ」を最初に使用したのはシドモアと考えられている。ちなみに「ツナミ」という言葉の歴史についての研究としてJulyan H. E. Cartwright and Hisami Nakamura “Tsunami: A History of the Term and of Scientific Understanding of the Phenomenon in Japanese and Western Culture”<sup>(7)</sup>がある。この論文では、「ツナミ」という言葉が日本の文献に表れた起源から始まって、欧米の文献の登場に触れている。なお、ハーンの創作の背景については、「稲むらの火」由来記として、白岩昌和「明治三陸大津波を伝えた外国人記者と作家の想い」(『地理』2013年9月号)のような研究があることを挙げる。

これまで言及したシドモアやハーンの商品にお

いて「ツナミ」は普通に使用されたとは言い難い<sup>(8)</sup>。臨場感をだすために現地の表現を重要視し、その効果を狙ったものといえるだろう。当時、英語ではまだ“tidal wave”が津波を著す標準的な言葉であり、既に触れたトッドのエッセイでは、タイトルも含めて“The Tidal Wave”であった。

最後に、シドモアが現地入りして『ナショナル・ジオグラフィック』のために書いた明治三陸大津波の記事を、トッドのものと比較する。トッドのエピソードにはないもので、シドモアが気になったのが、欧米人の動向である。現地にいたフランス人神父が津波で命を落としたという。なお、救済のために外国人としていち早く被災地入りしたのが、アメリカ人のエドワード・ローゼイ・ミラー牧師（Edward Rothesay Miller, 1843 - 1915）であり、アメリカ式自転車をを用いたため一日半しかかからなかったと述べている。この人物は、日本に赴任した最初の女性宣教師でフェリス女子大の前身のフェリス セミナリオの創設に貢献したメアリー・E. キダー（Mary E. Kidder, 1834 - 1910）の夫で、当時盛岡を拠点に活動していたことから、被災地に最も近いところにいたのであった。ちなみに『南閉伊郡海嘯記事』によると、ミラー（記事ではミロル）が駆け付けたのは6月23日のことであった。

また、この津波で命を落とした人物として名前が挙がっていた唯一の外国人はフランス人神父であった。フランス人神父が命を落とした背景について、シドモアは、次のように説明している。すなわち、釜石の宿泊施設にいたラスパイユ神父のもとに、アシスタントが外から声をかけに来たとき波が神父を襲ったこと、また神父が流されながら泳いでいるのを目撃した人物もいたがその後の消息は不明だと述べている<sup>(9)</sup>。

この神父に関する記録としては、津波デジタルライブラリ『岩手公報』の災害出張日記（第二報）（18日午前釜石において）特派員 日戸勝郎の「悲話方々」と題する一節によると、「盛岡四ツ家街の宣教師仏国人某氏は加藤治と云う宿屋に泊りせしが当夜海嘯なりと聞いて急ぎ逃げ出せしその時同県会の某と云える人も同じく逃げ出せしに払人は入り口にて靴着け居る間に自分は先へ出

たり。その時波すでに追っ掛け来たりし故十歩を一歩に馳せつつ後見しに佛人は二間ばかり後れ来たり。間もなく波来りて自分の腰及び脚部を嘗められせし故一生けん命逃げ追わせて自分はようやく助かりしがその時払人は浚い去られしならんと。」となっている。

また、先に触れた『南閉伊郡海嘯記事』にもほぼ同じ文面の記事が見られる。これによれば、外国人は二人いて靴を履かないまま逃げた方は助かり、靴を履こうとしていた方が命を落としたとなっている。シドモアが何を参考に記事を書いたかは不明だが、おそらく、岩手県の現地に入った彼女は、現地の資料を見聞する機会をもったのであろう。しかも、当時としたら、外国人がそれほど多くない地方だけに、6月15日という日にたまたま滞在していて犠牲になった外国人被災者がいたという事実は、強く印象に残ったのであろう。

さらに、シドモアが記事に使用した被災者たちのエピソードでトッド作品にないものでは、次のようなものがある。日本人の忠誠心の表れとして、行方不明の家族を探すよりも流された御真影探しを優先させた校長の話を取り上げた。また、日清戦争に従軍したことから精神を病んだ元兵士が、津波のぶつかる音を敵艦の攻撃と勘違いし、銃剣をもって海岸へ走った話などもある。また、勘違いの例としては、火事と間違えて高台に様子を見に行ったことで命拾いした人物もいたという。トッドと重なるのは、雄勝で石の切り出しに携わっていた囚人が、津波で一時解放された後、再び自主的に戻ったという話、ならびに、旅館で被災した際、居合わせた女4人にしがみつかれた男が大きな塊となったために波に抗って救われた話などである。

また、津波の発生源としてのトスカロラ海淵の話なども二人とも共通している。ただ、シドモアは年月がたってからとはいえ、被災地に直接足を踏み入れたことから、支援物資の荷卸しの港だけしか見ていないトッドよりは、より凄惨な光景を目の当たりにすることになった。そのために、被災地の記述には正確な描写が際立ち、現地を見た人ならではの臨場感溢れるレポートとなっている。

## おわりに

1896年（明治29）6月15日20時過ぎ、6年前に起きた東日本大震災と同じくらいの巨大地震とそれによる津波が、三陸を中心とした三県に渡る地域を襲っていた。この時、今ほどではないにしろ外国人も日本に滞在しており、この地震直後に来日した外国人もいた。彼らの職種は様々で、宣教師を筆頭にトッドのようなエッセイストもいれば、シドモアのように雑誌のレポーターもいた。彼らは、未曾有の災害の中で、日本人がどう行動したかに注目したのである。トッドもシドモアも、極限状態に陥っても、なお自己を犠牲にする日本人に注目した。釜石の電信局長や御真影探しの校長など、いくつも例が存在していたようである。また、緊急事態の中で、囚人であっても規律を遵守する人々の様子を記さないではいられなかった。

シドモアの場合は誰が通訳をしたのかわからないが、すでに述べたようにトッドの場合は、的確に現状を通訳できる能力をもった村上春太郎がいた。村上本人はもちろん意識しなかっただろうが、彼の伝えた話がこうして作品化されて残っているのである。特に、非常事態の際、日本人はいかに行動するかが、被災地入りした外国人の関心を引いた。任務か、それとも家族のどちらを優先するのか。トッドもシドモアも任務を優先した日本人に敬意を払い、記事にした。

ただ、家族の中で救済すべき順位となると、美談云々では片づけられない問題が残る。トッドが目をつけた親を優先させた男の絵は、外国人にとってはとうてい理解しがたいものであったはずである。これを描いた小林清親は、どのような思いで描いたのか知るべくもないが、見た人びとに大きな衝撃を与えたに相違ない。大橋乙羽の解説のようになってしまったのであろうか。無情というか、悲惨さを訴えるための絵であったはずが、外国人の視点からすれば、夫婦の愛情に勝る日本人の親子の絆の強さを強く印象付けることになった。

最後に、トッドが使用した小林の絵から推定されるように、トッドが通訳に頼んで訳してもらったのが『文芸倶楽部』の増刊号であるならば、そ

この文芸作品についてもいくつか訳してしてもらっていたと考えられる。前述の拙稿では、新聞記事と照らし合わせて、トッドのエッセイのもとになったと考えられる事件や事項を紹介した。中でも際立っているエピソードは、津波で一時的に解放された雄勝の囚人が自主的に戻った話と、釜石の電信局長が家族を探すよりも電信の復旧に専心した話であった。これらは、新聞で紹介されただけでなく、先に触れた『文芸倶楽部』において、文芸作品となって掲載されていたのである。江見水蔭（1869－1934）の戯曲「磯白波」は、一時的に自由になった雄勝の囚人が家族に会いたいばかりに脱走を企てるものの、家族に諭されて戻るといふ人情ものになっている。また、電信局員の話は、石樽青苔（人物については不明）の小説「電信」となっていることを付け加える。

## 注

- (1) Mabel L. Todd, *Corona and Coronet: Being a Narrative of the Amherst Eclipse Expedition to Japan, in Mr. James's Schooner-Yacht Coronet, to Observe the Sun's Total Obscuration 9<sup>th</sup> August, 1896* (Boston & N.Y.: Houghton Mifflin, 1898)
- (2) Mabel L. Todd, 242-43.
- (3) Mabel L. Todd, 242.
- (4) Mabel L. Todd, 242-43.
- (5) Mabel L. Todd, 248.
- (6) ハーンの感動的な津波の物語には、実在する濱口梧陵（儀兵衛、1820－85）というモデルがいる。ハーンは明治三陸大津波に触発されてこの物語を書いたが、描かれた津波は、1854年11月5日に紀州を襲った安政南海地震によるものである。のちに中井常蔵により尋常小学校教科書に掲載の「稲むらの火」のもとになったのは、ハーンの「生き神」の一部である。

要約すると、丘の上の高台に家がある五兵衛は、津波の到来を察知したものの、村人に伝える手段がない。そこで、その場に干してあった稲束に火をつける。村人は消火のため

に丘に駆け上ってくるだろうから、津波から村人を救うためにはそれしかないと判断してのことだった。村人を助けた五兵衛は生きながらにして神に祀られた。

濱口梧陵（儀兵衛）はヤマサ醤油の当主。現在の和歌山県有田郡広川町において、1854年11月5日安政南海地震のおり、稲東を燃やして津波の到来を知らせたのではなく、闇の中で戸惑っている人々に藁などを燃やして高台の神社までの避難路を照らしたしたこと、ならびに被災後の村の復興のために私財を投じ、復興事業として広村堤（堤防）の建設を行ったことで知られる。現在は濱口梧陵賞（国土交通省が国際賞として、津波防災に貢献した個人及び団体を表彰するもので、2016年に設けられ、世界防災の日とされた11月5日に授与される）ができています。

- (7) *Notes & Records of the Royal Society*, (2008) 62, 151-66.
- (8) *Japan Gazette* という横浜の英字新聞が出した32ページからなる英文冊子 *The Great Disaster in Japan, June 15<sup>th</sup>, 1896* (富山大学ハーン文庫所蔵)の中に“Accounts from Various Sources”というタイトルのセクションがあり、『時事新報』の特派員による志津川（宮城県）からの電信を紹介した部分に、「ツナミ」という言葉を使用した次の例が見られる。At about 8 o'clock a fearful sound as that of a thunder-clap was heard and shortly afterwards the cries of *tsunami tsunami* were raised on all sides.” (本文のまま, p.26)
- (9) (8)で紹介した *Japan Gazette* の冊子中に不明となっている外国人神父についての記述が見られる。シドモアは神父の名前を Raspail (ラスパイユ) と綴っているが、*Japan Gazette* は神父の名前は Rispal (リスパル) で、1861年にフランスのリヨンで生まれ、1891年に函館に赴任し、それから盛岡に来たこと、ならびに神父に同行していて助かった助手は日本人の吉田キゾウ (喜蔵?) とある。(p.27)